

A

図A-1 貯留構造物付近（土留コンクリート壁・土側溝）詳細図

〔貯留構造物の安定計算〕

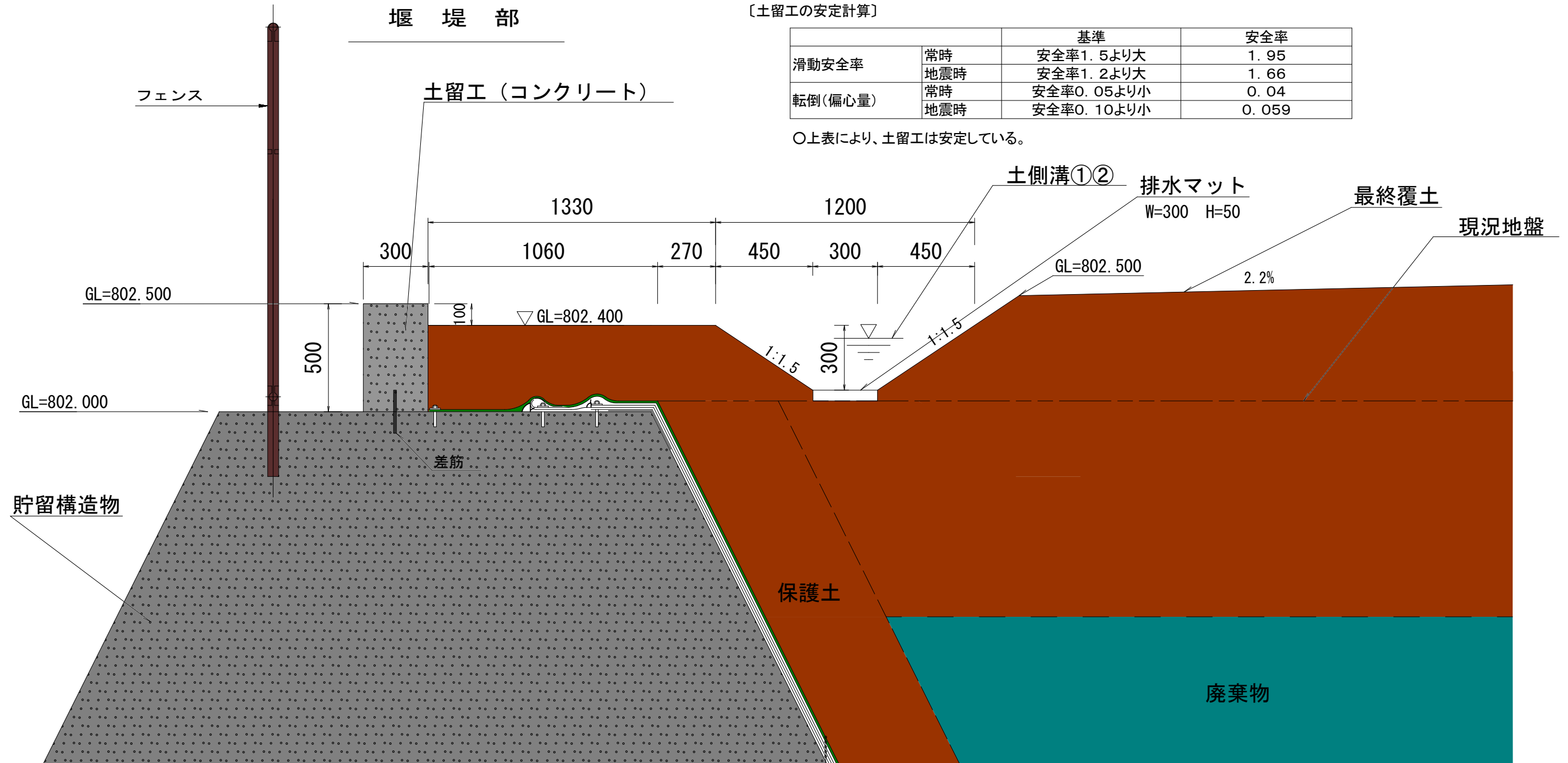
		基準	覆土の標高802.5m
滑動安全率	常時	安全率1.5より大	2.37
	地震時	安全率1.2より大	1.36
転倒(偏心量)	常時	安全率2.78より小	0.01
	地震時	安全率5.56より小	0.85
支持力度	常時	許容値400より小	248.3
	地震時	許容値600より小	333.4

○上表により貯留構造物の天端より0.50m高く覆土しても安定性に影響しない。

〔土留工の安定計算〕

		基準	安全率
滑動安全率	常時	安全率1.5より大	1.95
	地震時	安全率1.2より大	1.66
転倒(偏心量)	常時	安全率0.05より小	0.04
	地震時	安全率0.10より小	0.059

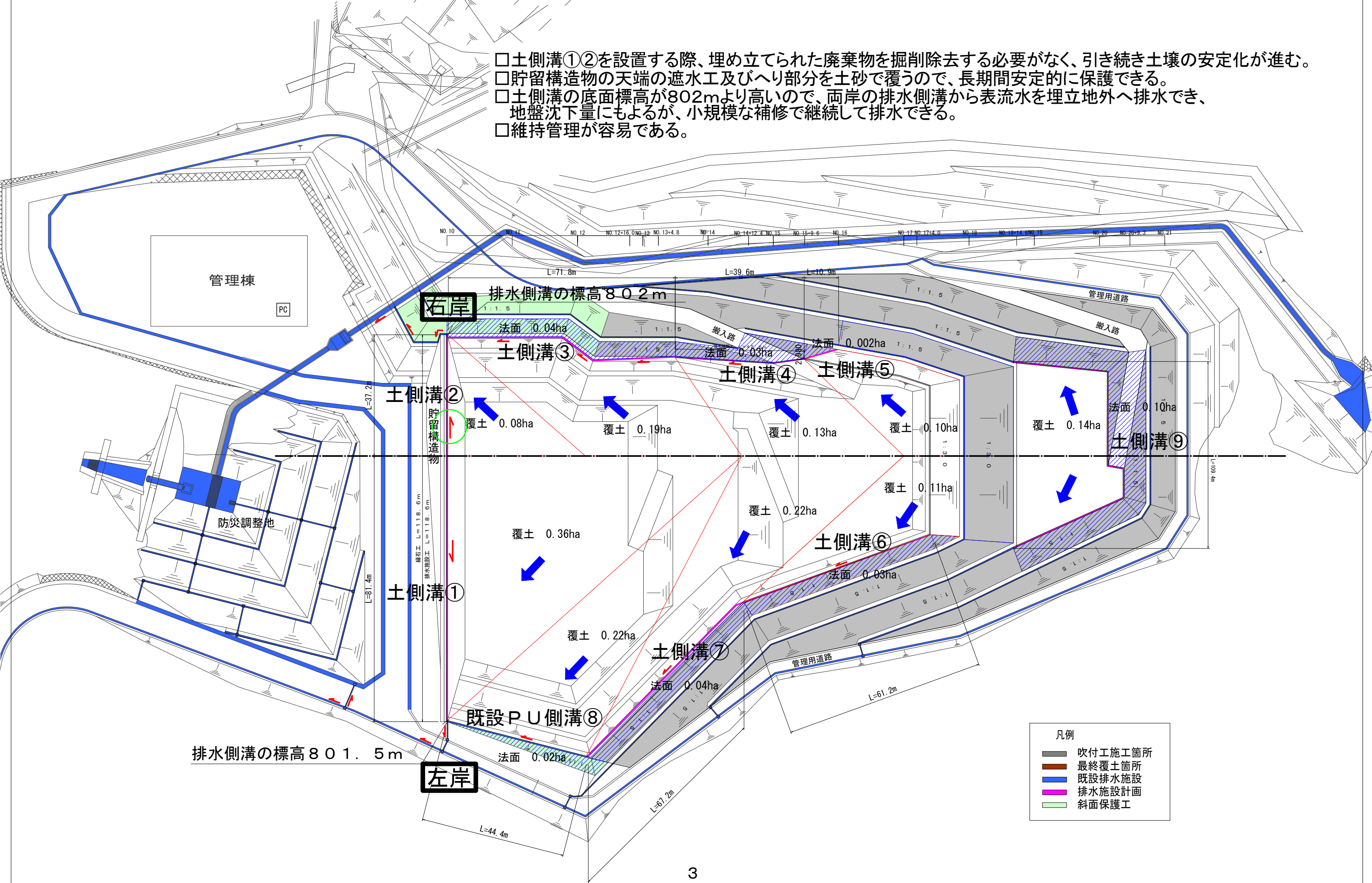
○上表により、土留工は安定している。



- 保護マット(遮光性不織布 t=10mm)
- しゃ水シート(TPO t=1.5mm)
- 自己修復性シート(中層不織布含む)
- しゃ水シート(TPO t=1.5mm)
- 不織布(t=10mm)

A 図A-2 覆土表面の雨水の流向及び排水計画

- 土側溝①②を設置する際、埋め立てられた廃棄物を掘削除去する必要がなく、引き続き土壌の安定化が進む。
- 貯留構造物の天端の遮水工及びへり部分を土砂で覆うので、長期間安定的に保護できる。
- 土側溝の底面標高が802mより高いので、両岸の排水側溝から表流水を埋立地外へ排水でき、地盤沈下量にもよるが、小規模な補修で継続して排水できる。
- 維持管理が容易である。



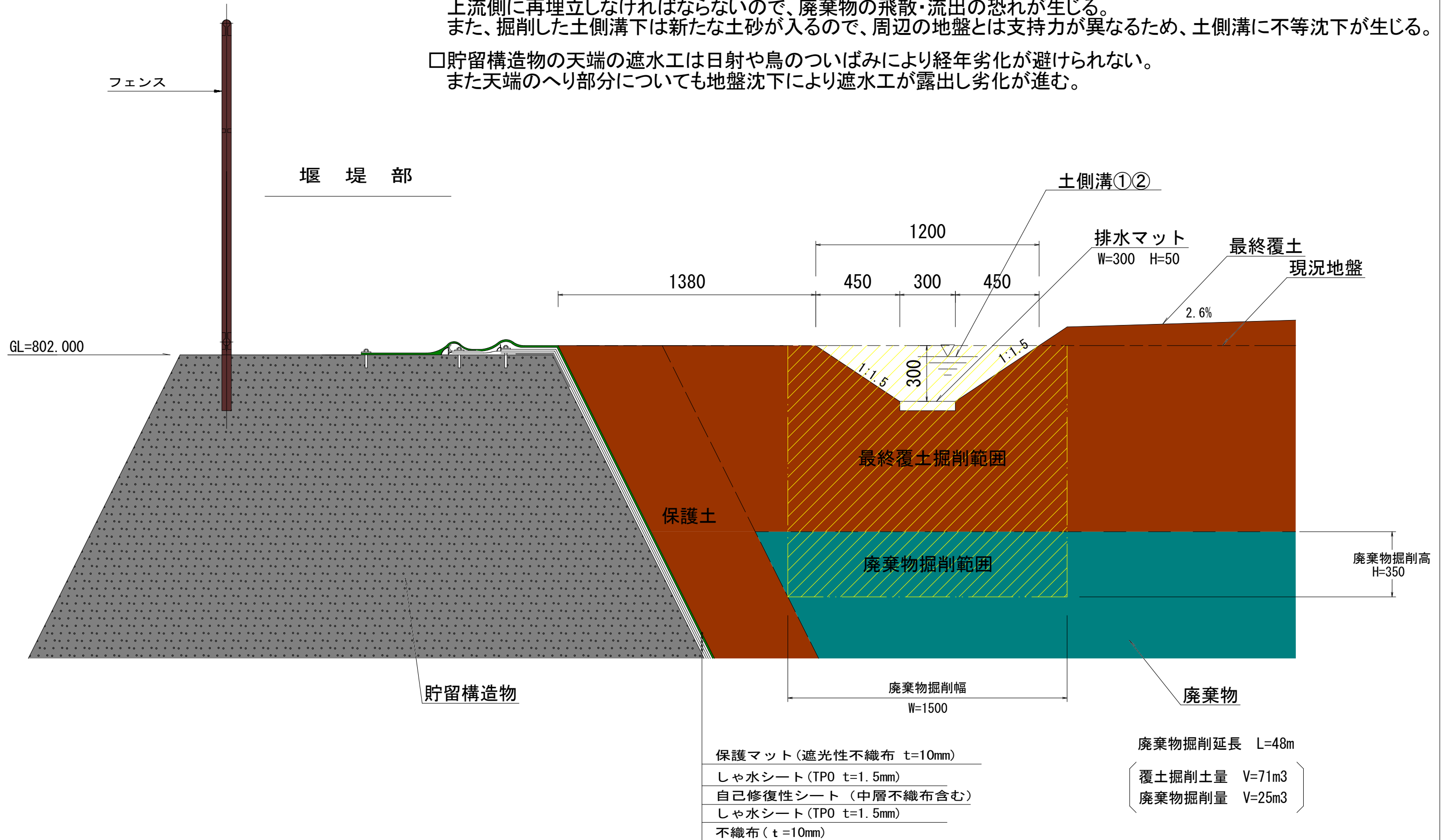
凡例

	吹付工施工箇所
	最終覆土箇所
	既設排水施設
	排水施設計画
	斜面保護工

B

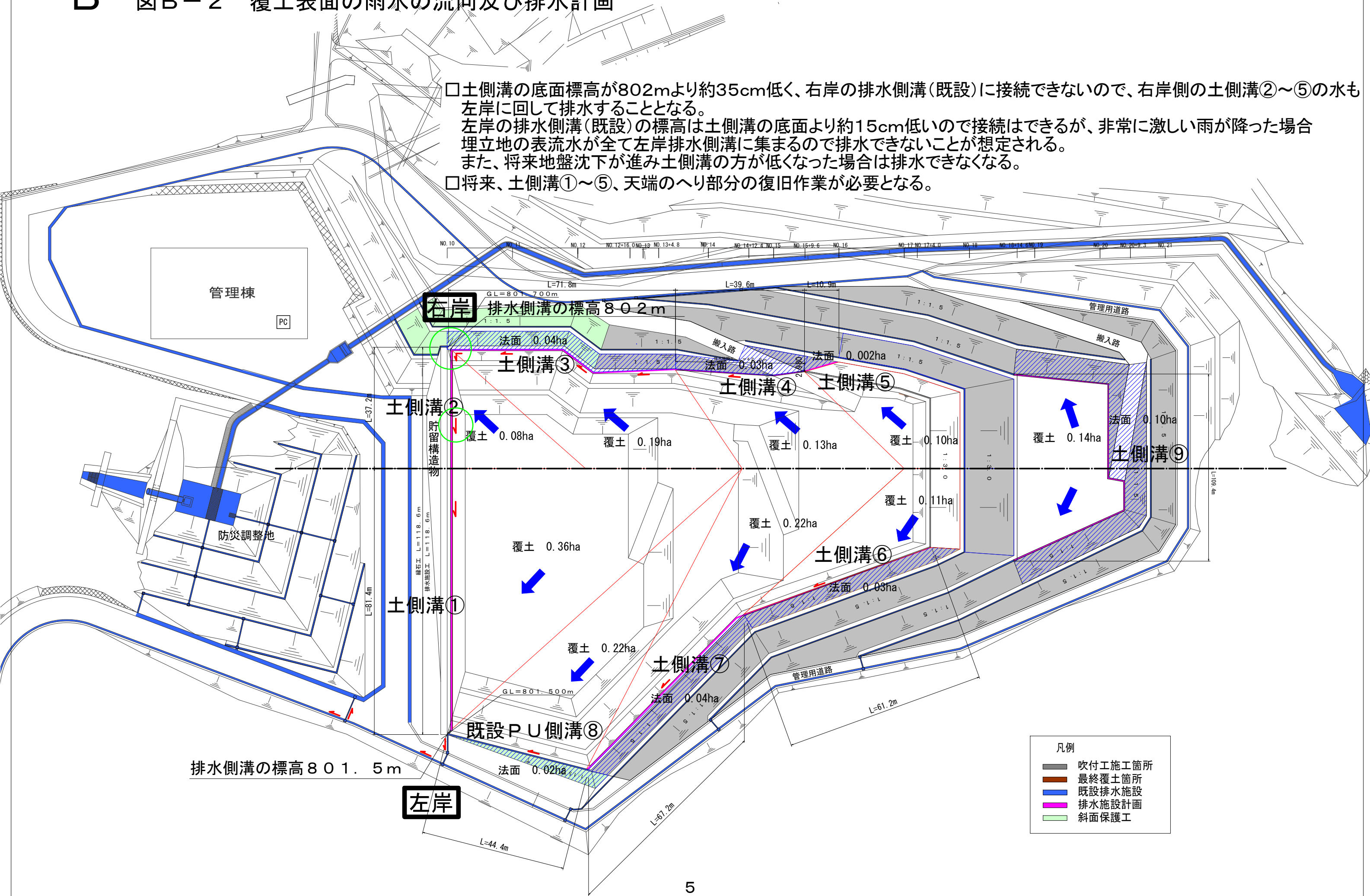
図B-1 貯留構造物付近（土留コンクリート壁・土側溝）詳細図

- 土側溝①②を設置するには、貯留構造物の内側の覆土及び廃棄物を掘削・除去（幅1.5m×深さ1.35m×長さ48m）し、上流側に再埋立しなければならないので、廃棄物の飛散・流出の恐れが生じる。
また、掘削した土側溝下は新たな土砂が入るので、周辺の地盤とは支持力が異なるため、土側溝に不等沈下が生じる。
- 貯留構造物の天端の遮水工は日射や鳥のついでみにより経年劣化が避けられない。
また天端のへり部分についても地盤沈下により遮水工が露出し劣化が進む。



B 図B-2 覆土表面の雨水の流向及び排水計画

□土側溝の底面標高が802mより約35cm低く、右岸の排水側溝(既設)に接続できないので、右岸側の土側溝②~⑤の水も左岸に回して排水することとなる。
 左岸の排水側溝(既設)の標高は土側溝の底面より約15cm低いので接続はできるが、非常に激しい雨が降った場合埋立地の表流水が全て左岸排水側溝に集まるので排水できないことが想定される。
 また、将来地盤沈下が進み土側溝の方が低くなった場合は排水できなくなる。
 □将来、土側溝①~⑤、天端のへり部分の復旧作業が必要となる。



- 凡例
- 吹付工施工箇所
 - 最終覆土箇所
 - 既設排水施設
 - 排水施設計画
 - 斜面保護工